

SMツアー：貴女の妄想叶えます

第1話：女囚性務所



濠門長恭

登場人物

高山昭雄（４５）

Splendid Marvelouse Tours 社長。

真性マゾ女性のための裏ツアーを手掛けている。

村上詩織（２８）：ツアーコンダクター

裏社員。ハードな拷問を好む。

柔道で「落とされる」のが大好き。

三人の参加者とともに女子性務所に服役する。

沢渡愛（２５）：ツアー参加者

婚約を解消されて半年後の傷心旅行。

林円花（２１）：ツアー参加者

短大卒。２年続けての就職浪人。

わざと抵抗して懲罰を望むほどのドM。

野々村早苗（１８）：ツアー参加者

卒業記念の旅行で、。

入学式までに帰国する必要がある。

友莉：罫に嵌められた一般受刑者

１年間の性奉仕を命じられて２か月目。

真穂：罫に嵌められた一般受刑者

入所５日目。処女だった。

恵理衣&伽紹留：現地在住日本人姉弟

経済犯罪者にされた父母の罪を軽減するために志願した。

フローラ：白人

わざと二回も入所している友莉以上のドM。

スヒョン&ソヒョン：姉妹

父親に強制されてポルノに出演したことが罪に問われた。
ポルノで演じた姉妹レズが病みつきになった。

チャニ：現地人少女

刑期は長い。

ムーダム：被差別民族の少女

入所前は、もっと劣悪な環境で売春を強いられていた。

ドク：性務所所長 ファン：医務官

ホワ、ギョム、レイ、グエン、パオ：刑務官

目次

0 . 起業と性癖と	- 7 -
1 . オフィスにて	- 12 -
2 . 仕組まれた逮捕	- 17 -
3 . 司法取引	
4 . 性務所の実態	
5 . 女性客のお相手 -	
6 . 刑期延長	
後書 -	

Splendid Marvelouse Tour へようこそ！

弊社では、貴女の被虐願望を叶えてさしあげるために
Suspenseful Option System
を御用意致しております。

Non Vartual / Non Fantasy / Non Role-playng

最少催行人員は1名様です。

末尾のメールフォームより、できるだけ詳しくご要望をお知らせください。

弊社が貴女に最適のプランを提案させていただきます。

なお、ツアー参加者の安全は社会的にも肉体的にも守れるよう最大限の努力を致しますが、必ずしもこれを保障するものではありません。

(現在まで、事故例はありません)

弊社にて定期的に催している企画もございます。国内限定で安全性も高く、料金も超格安に設定していますので、まずはこちらをお試しになられては如何かと思えます。

- 1：新年寒中水泳 1月4日（日帰り）
催行人員：1名様～30名様
参加費：交通費のみ（諸経費はお客様負担です）
男性同伴者との参加を奨めます。
禪での参加ですが、胸に晒を巻いていただきます。
- 2：禪海女ショーと夜の鮑売り 7月～8月随時
催行人員：1名様～3名様
参加費：交通費のみ（諸経費不要）
・地元女性の参加者が素潜りを指導します。
・鮑売りは自由参加です。
（売上代金の75%を還元致します。）
- 3：夏季相撲合宿 8月12日～8月17日
催行人員：3名様～8名様
参加費：交通費+3万円（諸経費含む）
・練習、宿舎とも男女同室です。
・女性も廻し一本で稽古していただきます。
・初心者にも、手取り足取り指導致します。
- 4：寒中座禅修行 12月10日～12月16日
催行人員：2名様～5名様
参加費：交通費+5万円（諸経費含む）
・修行は女性のみですが、一般男性が補助します。
・警策は肩だけを叩くとは限りません。
・座禅転がしは拒否できません。

SMツアー有限公司

0. 起業と性癖と

高山昭雄が大手の旅行会社を辞めて独立したのは、二年半前だった。有限会社の形をとってはいるが、実際には個人経営であり、独自のツアー企画による売り上げは三割がいいところで、元の会社の下請け業務が主な収入源だった。格安をうたい文句にするツアーの下請けだから、利益はゼロに等しい。二十年も業界にいて内情を知りつくしながら、それでも割に合わない起業に踏み切ったのは、彼の一種倒錯したフェミニズムによるところが大きい。

高山は若い頃、ツアーコンダクターをつとめていた時期があった。旅の恥は掻き捨てだが、インターネットがそれほど普及していなかった当時、ツアー参加者は恥の捨て場所を知らない。とうぜん、高山は夜も観光案内にいそしむことになる。ナイトクラブや公認の

売春館ですめばまだしも。東南アジアや東欧へのツアーともなると、非合法の性産業まで斡旋させられた。不法な要求を毅然と断わるどころか、共同正犯になったのだから——彼の倫理観や遵法意識も底は見えている。

その手の観光客には好評だった彼にも、苦手な相手がいた。ごく一部のマニアックな女性である。娼婦の真似事がしたい、SM館で本格プレイをしてみたい。それくらいならツテはある。しかし。

「麻薬所持で逮捕されても、肉体の賄賂で釈放されるってほんと？」

「ポニーガールの牧場が、この近くにあるとネットで見たのですけれど？」

「淫らな女は公開鞭打ちで罰せられるんですよ？」

合意、あるいはフィクショナルな関係におけるマゾプレイではなく、現実世界での被虐を体験したいという女性たちだった。実際にハードなSMプレイをしている女性もいたし、

妄想逞しい処女もいた。後者は自分の妄想が現実となったとき、おそらくその場では後悔するだろう。演技ではなく泣き叫ぶだろう。しかし、日が経つにつれて、当時を思い出しながらオナニーに耽るのではないか。高山は、そう考えた。

現実世界での被虐を安全に体験させるには、相応の事前準備が必要だった。ポニー牧場を例にとれば、まずオーナーとの信頼関係を築かなければならない。撮影の諾否についても、参加者と牧場側とで取り決めておく必要がある。高山が話をつけた牧場は裕福なサディストたちの共同経営だったが、ポルノの販売や男性訪問者からの高額な〈寄付〉で運営費の過半をまかっていた。

事前準備の手間は一般ツアーとの比ではない。現地スタッフに丸投げもできないし、官憲に賄賂が必要な場合もある。赤字すれすれの弱小旅行社が手がけられる仕事ではなかった。それでも高山が専属の裏社員を雇ってま

で『スプレンドィッド・マーベラス・ツアー
有限会社』を起こしたのは、特殊な願望を秘
めた女性への奉仕であると同時に……ツアー
コンダクターからの詳細な（たいていは写真
が添付された）報告書、自分ひとりではとて
も体験しきれない数々のシチュエーションを
堪能するためだった。

三つの国内企画を裏ページで公表したのが、
一年半前。五回の催行で参加者は延べ十七人。
たったこれだけの需要のために二人の専属ス
タッフを抱えているのだから、大赤字もいい
ところ。

とはいえ、あまり大っぴらに宣伝もできな
い。それどころか。表ページの隅っこに成人
女性限定のアンケートを設置して、プライバ
シーに係わる質問も含めて、百以上の項目に
答えさせ、その結果をA Iに分析させて、合
格者だけ裏ページに辿り着けるようにしてあ
るくらいだ。

高山はS O Sを維持するために、父が遺して

くれた貸しビルの収益をすべて注ぎ込んでいる。つまりは道楽、それともおのれの性癖を満たす代償行為なのだった。

1. オフィスにて

「そろそろホテルを出る時刻ですね」

社長室付の西川麻凜が掛時計を見上げて言った。現在催行中のツアーは七つ。そのどれのことを言っているのかは、明白だった。

「うん、そうだな」

高山はノートパソコンに目を落としたまま答えたが、それは内心の昂ぶりと一抹の不安とを隠すためだった。

「わたしも行きたかったな。今度のSOSシステムって、セックス浸けなんですよ。けっこう適任だと思うけどなあ」

「それじゃ、白い白馬から落ちて落馬するよなものだぞ」

「は……？」

ぼってりした唇を半開きにして、おねだりをしているような、あどけないまなざしを向ける麻凜。

「Suspenseful Option System システム。どこがおかしいかわかるだろ」

「あ、そうか。Splendid Morvelous Tours の裏社員にあるまじき失言でした」

自分の台詞を先取りされて、高山が苦笑した。

会社お仕着せの裏企画には違いないが、毎年というわけにもいかず、今回限りの、スーツにたとえるならイージーオーダーの企画が、いよいよ始まるのだ。しかも、麻凜か詩織を潜入させての体験調査ができなかったので、ぶっつけ本番になる。

高山は仕事に戻るふりをして、麻凜の画像を表示した。最初一枚は第一次適性試験。リボンをV字形にしただけの水着でサーファーのあいだを闊歩している雄姿を望遠レンズで撮影したものだ。剥き出しになったDカップと、リボンで隠しきれないふっくらした無毛の股間は、全裸よりはるかに扇情的だった。

つぎの数枚は第二次適性試験。高山に縛ら

れて縄酔いしたところ。乳首に針を刺されて絶叫しているところ。股間を鞭打たれて、必死に赦しを乞っているところ。

麻凜は野外露出のような羞恥責めには強いが、苦痛への耐性はあまりない。

今回のツアーに添乗した村上詩織は、その反対だった。SMプレイの経験値は六歳年下の麻凜よりずっと低いが、中学から二十代前半まで柔道を続けていた。強い男に投げ飛ばされ組み敷かれない(そのまま落とされたい)というのが動機だったというから、彼女のほうがマゾ性は深いと、高山は見ている。

そこで雑念は追い払って。高山はほんとうに仕事を始めた。といっても裏企画だから、雑念と妄想の集合体みたいなものではあるが。

開いたデータは、小さなAVメーカーを運営している友人から回してもらった、裸族の成人儀式についてのレポートだった。

思春期に達した男女が集まって、昼は(もちろん全裸で)神に祈りのダンスを捧げ、夜

は年配者から性の手ほどきを受ける。ヘビーな露出癖の女性が喜びそうな儀式だが、SMツアーのオプションに加えるには難点があった。未成年の性行為を助長するのは、さすがに拙い。

添付写真を見て、高山は首をかしげた。恥毛も生えていない少女が一本筋を剥き出しにして並んでいる構図は圧巻だが、列の後ろのほうには乳房もじゅうぶんに発達した、少女とは呼べない年頃の娘（無毛なのは剃っているのだろう）も何人かいたのだ。少女たちは紐で編んだような細い帯を腰のまわりに巻いていた。帯の色は白に統一されているのだが、体格の良い五人の娘たちだけは赤だった。

レポートには、その理由が説明されていた。一族の中で交配を続ければ、悪い影響が生じることを裸族も知っている。他部族の血を受け入れるために、結婚しても子を授からなかった娘たちが赤い帯を締めて列に並ぶのだという。近年は世界各国の一部マニアたちの知

るところとなり、他部族の男として儀式に参加する例もあるとか。指摘されてみると、踊りを取り囲む観光客からはなれて、裸族の扮装をした白人男性がふたり、遠景に写っている。

人種の違う男が参加できるのなら、人種の違う成人女性だって参加できるかもしれない。

まずは現地調査として、来春の儀式に麻凜を参加させてみようかと、高山は考えた。二十二歳の実年齢でも参加資格はありそうだが、五歳はサバを読めるあどけない顔をしている。髪を三つ編みにでもすれば、中学生で通用しかねない。Dカップが無ければ、だが。

SMT社の企画イベントにするには難しいが、こういった方面の需要はかなりある。個別対応オプションの手駒というわけだ。

2. 仕組まれた逮捕

現地時間午前五時半。村上詩織は起きるとすぐに、廊下に出してあるスーツケースを調べた。ナンバー錠の数字が変わっている。開けて中を探ると、一番底に白い粉を詰めたビニール袋があった。袋を破らないように注意してテープを少し剥し、粉を指に付けた。ざらついた感触は砂糖そっくり。意を決して舐めてみると、間違いなく砂糖だった。

詩織は、あずかっている鍵を使って他のスーツケースも開けた。三人全員のスーツケースに砂糖の包みが入っていた。

(予定通りね……)

数時間後に突如として自分たちに襲いかかる悲劇を想像すると、股間が湿ってきた。

沢渡愛、二十五歳。昨年秋に婚約を解消されて、半年遅れの傷心旅行。

林円花^{まどか}、二十一歳。短大卒業後、二年続け

ての就職浪人。

野々村早苗、十八歳。四月には専門学校に進学予定。

そして村上詩織、二十八歳。S M ツアー社の社長室付 兼 裏添乗員。

この四人は麻薬密輸の嫌疑で逮捕され、司法取引に応じるが、後日に誤認逮捕だったと判明して釈放される。これが、S O S のシナリオだった。

詩織はビニール袋を元に戻すと、社長に最後のメールを送るために部屋へ戻った。

麻凜が「そろそろホテルを出る時刻」と言ったそのとき、バスは空港に着いていた。

離陸の一時間前、人けのすくないときを見計らって、四人は出国窓口へ行った。

『マドカ・ハヤシだな。こちらへ来い』

待ち構えていた警官が、先頭にいた円花の腕をつかんだ。ほとんど同時に、後ろの三人も身柄を確保された。

『これは、どういうことですか。説明してください』

詩織は添乗員として当然の抗議をしたが、強い力で腕を引っ張られて、空港ビルの片隅にある部屋へ連れ込まれた。

『これを知っているな？』

四つのビニール袋が、目の前の机に並べられた。

「ホワット・イズ・ディス？ アイ・ドント・ノウ」

警官の英語も流暢からほど遠いが、沢渡愛の英語はカタカナ書きがふさわしいレベルだった。もともと、そのおかげで、台本の棒読みとは悟られずにすんだ。

『これはヘロインだ。密輸の罪で、おまえたちを逮捕する』

『待ってください。それはわたしたちの物ではありません。それに、見ただけでヘロインだとわかるのですか？ きちんと調べてください』

『反論は裁判所でしろ。品物の検査は専門の機関で行なう。俺たちの任務は、おまえたちの逮捕だ』

『それは理不尽です』

ばしん。

「きゃあ！」

机越しにビンタを張られてよろめき、詩織は隣の早苗にぶつかった。

『おまえからだ』

詩織は腕をつかまれて、他の三人から引き離された。

『両手を水平に上げろ。両脚を開け』

この場の指揮を執っている警官が、右手でビンタを張る構えになって詩織を脅す。

『ボディチェックなら、婦人警官が立ち会うべきです』

警官の返事は二発目のビンタだった。

詩織は警官をにらみつけながら、命じられた姿勢を取った。

二人の警官が左右からボディチェックを始

めた。いや、役得の女体凌辱だった。

「あっ……」

スーツの前を強引に開けられてボタンが千切れた。

『やめてください……きゃっ！』

ブラウスをはだけられブラジャーを筆り取られて抗議した詩織の頬に、三発目のビンタが飛んだ。

両側から乳房をつかまれ、こねくりまわされても、詩織は黙って耐えた。しかし、正面で監視している警官を睨みつけるのはやめなかった。その毅然とした態度がサディストの嗜虐心を煽るのは計算済みだ。

監視役の警官が、部下に現地語で命令を出した。詩織のスカートがまくり上げられ、ショーツを膝まで下ろされた。

『女は身体にポケットを持っている』

監視役の警官が右手を下ろすと、いきなり指を挿入してきた。

「くう……」

いくらマゾヒストでも、シナリオ通りの展開だとしても、真正の凌辱に直面して、性的興奮よりは恐怖のほうが勝っていた。だから、乾ききったヴァギナには指一本でも苦痛を感じたのだが――荒々しく掻きまわされると、女体の自然な反応で濡れてしまう。

ボディチェックが終わると、服装の乱れを整える猶予も与えられず、後ろ手に手錠を掛けられた。しかもスカートの後ろを手錠に絡められた。詩織は乳房と尻を露出したまま、三人の横に並ばされた。

続いて、いちばん若い早苗が引き出される。筋書きを知っていても、恐怖に引き攀った顔は演技ではなかった。小刻みに身体を震わせながら警官の命令に従った。セーターをたくし上げられてブラジャーを引きちぎられ、生乳を揉まれる。しかし、詩織のときよりは優しい揉み方だった。ジーンズがショーツもろとも膝まで引き下ろされて、早苗は助けを乞うように詩織を見た。

『心配しないで。この人たちは警官。非合法なことはしない』

警官にも理解できるように簡単な英語で早苗を励ましたのだが――彼らに皮肉と受け取られたら、もっと手ひどく扱われるだろう。そう考えると子宮がキュンッと縮んだ。

早苗はセーターとジーンズを元どおりに直されてから、やはり後ろ手錠を掛けられた。

あとの二人は、詩織や早苗ほどには魅力を感じなかったのか、たんに時間の問題なのか、服の上からのボディチェックだけで済んだ。

四人は腰縄で数珠つなぎにされて、入ったのとは別のドアから職員専用通路へ引き出された。詩織はショーツが足元までずり落ちてしまい、そのままでは歩きにくかったので、思いきって足から抜いてしまった。空港の職員通用口まで歩かされるあいだ、何人もの男女とすれ違ったが、誰もが知らん顔。そこに警官も詩織たちもいないように振る舞った。政府直轄の裏組織の恐ろしさを、詩織はあら

ためて思い知ったのだった。

詩織たちは灰色のマイクロバスに乘せられた。車体にはなんの文字も書かれていないが、窓に鉄格子が嵌められているのだから、ひと目で囚人護送車だとわかる。

警官も指揮官を含めた二人が乗り込んだ。「きっと、なにかの間違いよ。疑いが晴れるまで、この人たちの命令に従っていきましょう」

きちんと芝居を続けるのだと、詩織は三人に念を押しした。

『しゃべるな。言いたいことがあれば英語を使え』

指揮官に厳しい声で制止されて、それから四人とも黙りこくった。